

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>釈教の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさゑ、蝶子、沙月式部、雪実少納言、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakiunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakiunichi.net/waka/				
自撰日	釈教の題	歌 岩崎純一詠	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
2008/4/24	摩訶般若波羅蜜	ちり置ける紅葉のあとの心だに秋にもまさる月や見るらむ	散り置いた紅葉のように、塵が置いたあとの我々衆生の心さえ、秋の月にも勝るほどの心の月を見るであろうか。	◇仏語 「心の月<心月」 ◇掛詞 「散り×塵」	◆仏語の「心月」を訓読して和歌にとらえた一首。落ち着きと風格が感じられる。(園井長光)	
2008/7/7	色即是空、空即是色	露のみのまさかの色は数見えずむなしき空をゆく蜚かな	露のような身である蜚が今、目の前を無数に飛んでいる。我が目の前の光景という色も、全ては、虚空をゆく、実在と非在の間の境なのである。	◇掛詞 「露の身×露飲み」		
2008/7/17	無常	裏表(うらうへ)にはちす葉うつる夜(よる)の池の心の底にゆるぐ月影	裏表を逆にして翻りながら、蓮の葉が夜の池に映る。その真ん中のさらに奥に、生々流転する現世界に縁起する我が心の奥を映すように、揺れる月影である。	◇掛詞 「映る×移る」「夜×世」「池の心×心の底」		
2008/7/26	羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶	我はただ世にて世になく月を見て羯諦羯諦(ぎゃーてーぎゃーてー)空の煌き	私はただひたすら、この世にあって、すでにこの世にいない心地で月を眺めており、般若心経の経文を唱えつつ、色即是空の真の煌めきを大切に続けるのみである。			
2008/7/27	阿耨多羅三藐三菩提	阿耨多羅三藐三菩提(あのかたらさんみやくさんぼだい)夕されば我が袖に降る白妙の雪月花の色にこそしけ	究極の悟りは、夕方になると、我が袖に季節ごとに降ってくる純白の雪月花の色に匹敵する純潔さをもって、袖に敷いてくるのであった。	◇掛詞 「敷け×及け」		
2008/7/27	遠離一切顛倒夢想	心にはいかなる秋の風吹くも葛の裏葉を返すべからず	秋風が吹くと、葛は裏葉を見せるが、菩提心を起こさんとする衆生の心においては、そのように言動が一定しないことがあってはならない。			